

「第2回世界津波博物館会議 2018」および「ICOM-ASPAC（国際博物館会議アジア太平洋地域連盟）KYUSHU, JAPAN 2018」に参加、協力しました(2018/11/30-12/01)

テーマ：世界津波の日、津波博物館

場所：東京国立博物館 および 九州国立博物館

制定以来3回目の「世界津波の日」のタイミングで、2018年11月30日（金）、東京国立博物館大講堂において、「第2回世界津波博物館会議」が開催されました（主催：国連国際防災戦略事務局 UNISDR・日本国外務省・東アジア・アセアン経済研究センターERIA、協力：東北大学災害科学国際研究所）。昨年開催された第1回会議に続き、今回も津波や防災に関して議論と連携を深めるため、国内外から博物館関係者が集まりました。また、翌12月1日には、九州国立博物館にて「ICOM-ASPAC（国際博物館会議アジア太平洋地域連盟）KYUSHU, JAPAN 2018」が開催され、前日の世界津波博物館会議の成果報告が行われました。当研究所からは、今村文彦所長、小野裕一教授（情報管理・社会連携部門）が講演・司会等で協力し、また、サッパシー・アナワット准教授（災害リスク研究部門）、マリ・エリザベス助教（人間・社会対応研究部門）、ボレー・セバスチャン助教（情報管理・社会連携部門）、中鉢奈津子特任助教・鈴木通江技術補佐員（広報室）が、運営面等で協力しました。

世界津波博物館会議では、福井照衆議院議員らの挨拶に続き、「津波による脅威の伝承の重要性」と題し今村所長による講演が行われました。また、今年は北海道南西沖地震25周年であることから、「時間軸」をテーマに、奥尻島津波館関係者による報告や仙台市長による震災遺構・荒浜小学校に関する紹介が行われたほか、ユネスコ、インドネシア・アチェ、中国・四川、チリ、東北、東京、京都、九州からの博物館・公文書館関係者・研究者らが博物館および災害記憶の保存に関する現状や課題を議論し、小野教授は締めくくりにまとめを発表しました。九州に舞台を移した翌日のICOM-ASPACでは、今回の第2回世界博物館会議の成果報告が、国際博物館会議アジア太平洋地域連盟関係者・一般市民へ向けて行われました。今回の第2回会議も、世界から多彩な津波博物館関係者が集い、現状を共有しながら今後のグローバルな協働へとつなげる貴重な機会となりました。

「第2回世界津波博物館会議」プログラム

・オープニング

挨拶：松岡由季 UNHSDR 駐日事務所代表、山中燐子 ERIA 特別顧問、銭谷眞美 東京国立博物館長、福井照 衆議院議員

・第1部「災害の脅威の伝承」

講演：今村文彦 所長「津波による脅威の伝承の重要性」

講演およびパネルディスカッション：安達恵子 奥尻島津波館説明員、ハフニダール インドネシア・アチェ津波博物館館長、Feng Zhengbi 中国・5.12 ウェン川特大地震記念館主任、郡和子 仙台市長（震災遺構・荒浜小学校について）、リカルド・トロ・タサラ チリ内務公安省国家緊急対策室長官（チリの災害記憶の継承活動について）

座長：小野裕一 教授（情報管理・社会連携部門）

・第2部「災害の記憶の保存・継承に向けて」

講演およびパネルディスカッション：ミルタ・ロウレンコ ユネスコ事務局、神庭信幸 東京国立博物館名誉館員、芳賀満 東北大学教授、阿久津智弘 国立公文書館業務課保存係長

・閉会

まとめ：小野裕一 教授

挨拶：佐々木丞平 京都国立博物館長、島谷弘幸 九州国立博物館長

文責：中鉢奈津子（広報室）

写真：鈴木通江（広報室）

（次頁へつづく）



今村文彦 所長による講演



第2回世界津波博物館会議 集合写真



ICOM-ASPAC2018 パネルディスカッション



ICOM-ASPAC2018 集合写真